

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター
NCGM通信

2022.6.13
Vol.3 第3号
3月～5月 (季刊)



(前例左から) 杉山センター病院長、国土理事長、新井神経内科診療科長 (副センター長)、原副院長・脳卒中センター長、井上脳神経外科診療科長 (副センター長)、清水師長、藤谷リハビリテーション科診療科長、佐藤看護部長 (後列) スタッフの皆さん

3月3日、センター病院9階東病棟に脳卒中センターを開設、SCUを6床から9床に増床しました！

「Feel the NCGM Plus」第3号です。表紙の写真は新たに開設された脳卒中センターのスタッフです。

これまで4階にあったSCU病棟を9階に移転し、6床から9床に増床いたしました。また病棟内のリハビリテーション室も拡張し、脳卒中後の回復に向けて早期のリハビリが今まで以上に積極的に取り組めるようにいたしました。透析や高感度脳波にも対応する重症者用個室も設置し、軽症の方から重症の方まですべての脳卒中の患者さんに迅速に対応できる体制となっております。

→ 詳細は次ページへ

センター病院の脳卒中センター/SCUについて

当院は2014年12月にSCU（Stroke Care Unit）を6床で開設し、以来多くの患者さんを受け入れてきました。2019年9月には日本脳卒中学会認定の「一次脳卒中センター（Primary Stroke

Center: PSC）」となっています。コロナ禍であっても、24時間365日、可能な限り地域で発生した急性期脳卒中の患者さんを受け入れ、最先端の治療を提供することで地域に貢献しています。



スタッフステーションとスカイツリーを望む東側の風景

当院での脳卒中診療は、脳卒中専門医6名（うち指導医4名）、脳卒中の外科技術指導医1名、脳神経外科専門医5名（指導医5名）、脳血管内治療専門医2名（指導医1名）、脳神経内科専門医3名の各学会認定神経系専門医とリハビリテーション医、救急医、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、放射線技師、看護師、薬剤師、管理

栄養士、MSWなど多職種からなるチームを組み、発症直後から高度な専門治療の提供を可能にしています（専門医指導医資格については一部重複あり）。将来的には15床まで拡張可能な設計となっています。



（左から）原徹男副院長・脳卒中センター長、藤谷順子リハビリテーション科診療科長、井上雅人脳神経外科診療科長



代々木方面を望む南側の風景



広さを確保してシャワーも使える最新のバスルーム

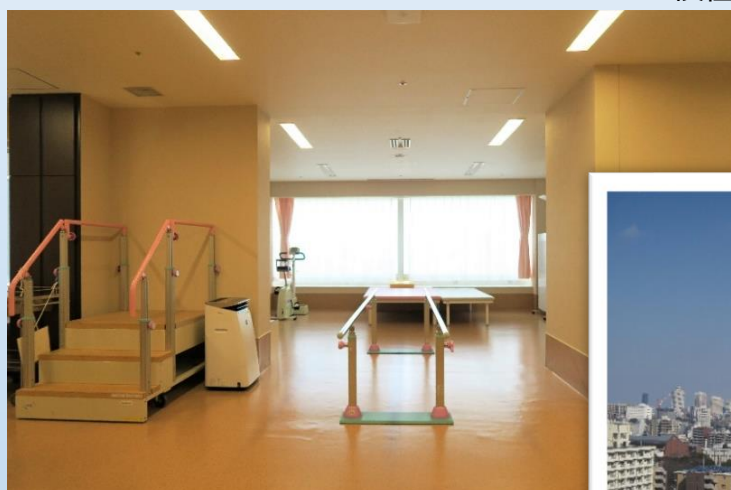
<SCUの設備紹介>



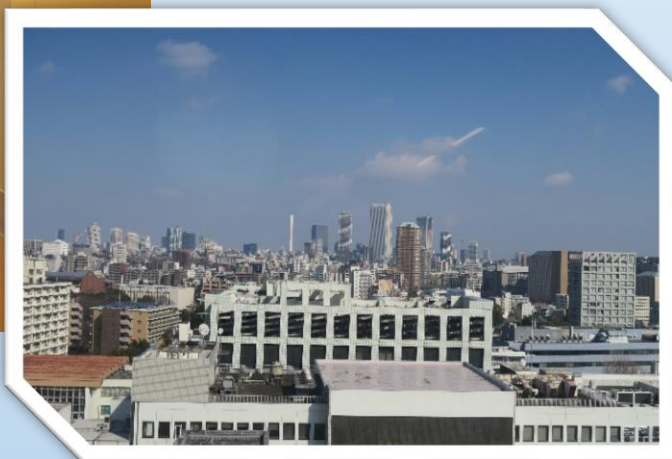
人工呼吸器などの数値を経時的にモニターできる重症患者支援システムを装備した病室



スタッフステーション。チーム医療を積極的に行っています。



患者さんの状態や目標に合わせて様々なリハビリを提供していきます。広々としたリハビリ室には空気清浄機を備えています。また、リハビリ室の患者さんの心電図を、スタッフステーションでもモニタリング可能です。

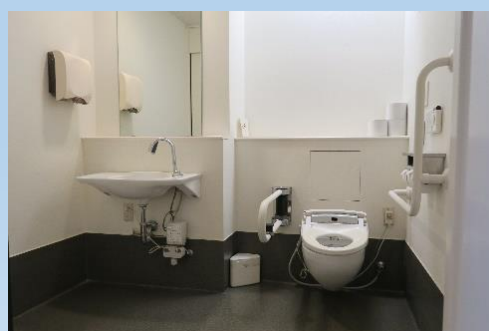


9階に移動したので、リハビリ室から池袋方面が一望できます。

「景色を見ながら、気持ちも晴れる」と患者さんは、リハビリに対しても意欲的に取り組むことができます。



言語療法室では、静かな個室で集中してコミュニケーションなどのリハビリを提供します。嚥下訓練や口腔ケアの必要性を考えて洗面台も設置しています。



リハビリを兼ねながらトイレ訓練が行えます。

5月12日は



看護の日

看護の心をみんなの心に

日本看護協会の
キャラクター
「かんごちゃん」

5月12日～19日、「看護の日」展示を行いました

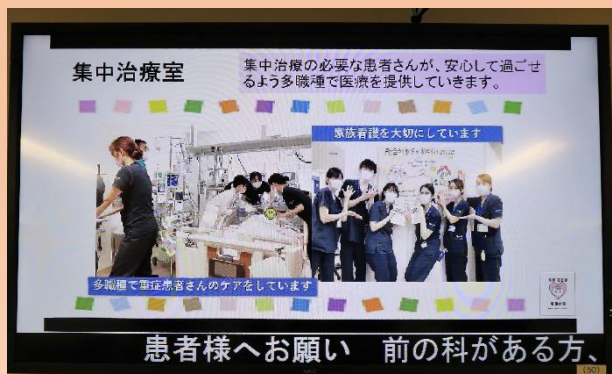
センター病院・国府台病院の看護部では、期間中、「看護の日」の展示を行いました。センター病院では、「専門分野のスペシャリストとして働く看護師の活動の様子」などをアトリウムと1階会計・3階待合のデジタル掲示で紹介しました。国府台病院では、看護部の紹介と「みんなに届け、看護の心」の寄せ書きを掲示しました。

【センター病院】

【国府台病院】



センター病院アトリウムでの展示

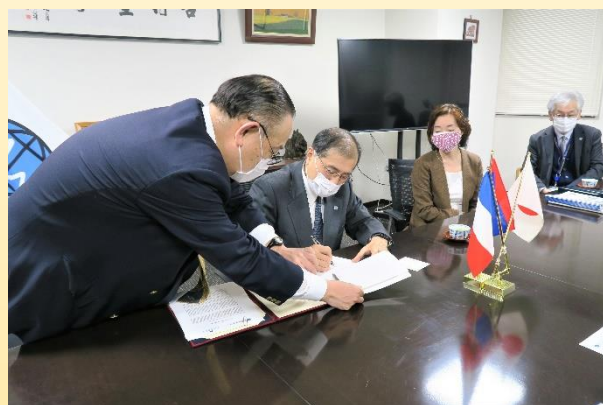


患者様へお願い 前の科がある方、
センター病院のデジタルサイネージ

薬剤部・リハビリ科・栄養管理室にも
協力いただきました

NCGMと仏パスツール研究所、およびNCGMとラオス国立パスツール研究所との間でMOUが継続締結されました

2022年3月、NCGMとパスツール研究所（IP）、およびNCGMとラオス国立パスツール研究所（IPL）は、それぞれの包括的連携協定（MOU）の延長に合意し、4月21日に国土理事長がまず署名を行いました。

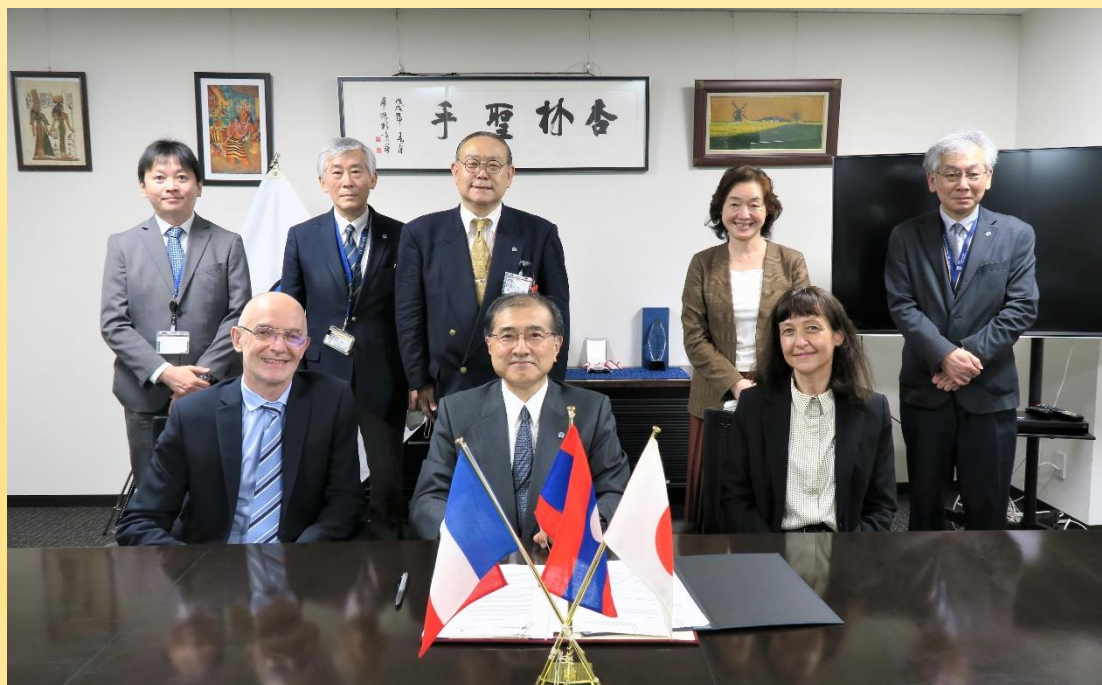


MOUに署名をする国土理事長

署名の証人として、在日フランス大使館からディディエ・マルティ＝ドシュ科学技術参事官ならびにミリアム・バラタン科学技術担当官のご臨席をいただきました。

署名された協定書は直ちにpdfファイルでIPおよびIPLに電子郵送され、先方IP、およびIPLそれぞれの所長の署名をもって有効となりました。

今回、それぞれのMOUの延長により、パスツール研究所ネットワークとNCGMは、互いの研究機関としての長所を再確認することで、感染症やその他関連する疾患の予防や治療、流行対策に資する共同研究の世界展開を目指します。



（後列左から）市村康典国際医療協力局医師（5月にラオスに派遣予定）、石坂幸人副研究所長、狩野繁之部長、池田千絵子国際医療協力局長、針田哲企画戦略局長（前列左から）ディディエ・マルティ＝ドシュ科学技術参事官、国土典宏理事長、ミリアム・バラタン科学技術担当官

令和4年度 国立看護大学校の入学式が行われました

令和4年4月8日（金）、雲一つない晴天の下、国立看護大学校（清瀬市）の令和4年度入学式が開催されました。晴れて入学した看護学部112名、研究課程部12名が参加しました。今年も国歌や校歌は演奏に合わせて心の中で歌うなど、感染対策がとられる中での開催となりました。

4月に着任した萱間真美大学校長は、その式辞の中で「NCの現場で患者・家族の経験や医療者の支援を学び、将来的に地域ケア、行政、政策にも関与できる、広い視野を養っていただきたい」「集中できる時間を確保し、新しい知識や技術を謙虚に学んでいただきたい」との言葉で学生たちに対する期待を示しつつ、入学を祝福しました。

厚生労働省医政局研究開発振興課長の笠松淳也氏からは、厚生労働省医政局長の祝辞が紹介されました。

NCGMを代表して祝辞を述べた杉山温人センター病院長は「皆さん

の未来は無限の可能性を秘めています。新型コロナウイルスに負けず、大志を抱いて日々の研鑽に励まれることを期待しています」とエールを送りました。

学生たちの表情は、入学の喜び、今後に対する期待と不安など、様々な感情が入り混じったものに見えました。新型コロナウイルス感染症が収束するまでの間は、様々な制約が想定されるところですが、国立看護大学校の教職員や、関係機関の関係者による支援の下、そうした制約を乗り越えて、充実した学生生活を送っていただきたいと思います。



祝辞を述べる杉山センター病院長



入学式の様子



萱間大学校長

3月25日、「新型コロナウイルス感染症対応に資する人材養成研修会」が首都圏の医療関係者に対して行われました

本研修会は、厚生労働省補助事業の「人材ネットワーク運営委員会」が主催し、NCGM国際感染症センター（DCC）が実地研修を行ったものです。首都圏7病院から参加があり、コロナ病棟見学として、5階西病棟、HCU（集中治療の様子）を視察し、新感染症病棟において電動ファン付呼吸用保護具の着脱を体験しました。

その後、研修棟地下レセプションルームで、DCCにおける診療と感染対策についてプレゼンテーションを行いました。最後に国土理事長が「本日は、かなり踏み込んだご質問ばかりで、臨床現場のニーズをひしひしと感じました。皆さんと協力して、コロナが一日も早く収束するよう願っております」と挨拶しました。



HCUで、説明する山元佳医師、高橋美穂師長（当時）



5西スタッフステーション



PPE装着（上）新感染症病棟で説明する氏家無限医長（下）



大曲センター長、森岡慎一郎医長、佐藤ルブナ医師らがプレゼンを行いました



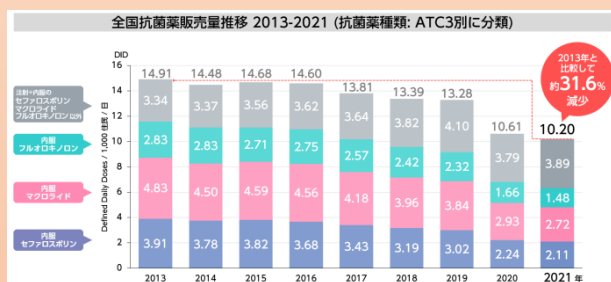
挨拶を述べる国土理事長

3月19日、AMR臨床リファレンスセンターは2021年度「総括セミナー」をオンラインで開催しました

AMR臨床リファレンスセンター (AMRCRC)は、厚生労働省委託事業として2017年に設立しました。今回のセミナーでは、設立から5年間の各室における成果の報告と、意識調査などの結果の数字から見てきた薬剤耐性の現状をふまえ、今後の課題や国民や医療従事者へのアプローチ施策などについて、どのようにAMR対策に取り組んでいくのか、各室から発表しました。本セミナーには医療従事者、医療系メディアなど、97名が参加しました。

動画は以下から
ご覧いただけます。

<https://youtu.be/VHkuc5OJuT4>



日本の薬剤耐性対策のこれまでと今後の方向性



AMRCRCセンター長
大曲 貴夫

AMR対策サーベイランスの現在地



臨床疫学室 室長
松永 展明

抗菌薬使用のサーベイランスとシステム開発



薬剤疫学室
大野 茜子

国民・医療従事者の知識・理解は進んだか 教育啓発の取り組み状況



情報・教育支援室長
藤友 結実子



総括セミナーの様子

4月26日、第4回WHO協力センター国内連携会議が葛西WHO西太平洋地域事務局長を迎えて開催されました

WHO協力センター会議は、国内WHO協力センター（WCC）の連携協力の促進を目的として2017年から開催されています。

国土理事長は、開会挨拶で次のように述べました。

「今回、オンラインではありますが、第4回を開催されることを大変うれしく思います。世界がCOVID-19という共通の試練に立ち向かってきた、この2年間、ど

の協力センターも様々な工夫を重ねながらそれぞれの活動を続けてこられたと思います。本日は『ポストCOVID-19未来を見据えた効果的な連携・協力を考える』をテーマに、厳しい状況の中から生まれた具体的な連携・協働の事例を共有していただいて、日本のWHO協力センターが新たな発展を遂げる契機となることを期待しております。」



左から、国土理事長、葛西健WHO西太平洋地域事務局長、池田国際医療協力局長

葛西WPRO事務局長からは「地域内の各国が違う状況を抱えていますが、4つの未来の共通課題があります。①AMRを含む健康危機管理、②生活習慣病と高齢者対策、③環境保健・気候変動の健康に対する影響、④“Reaching the unreached”（まだ基本的な保健サービスを受けられないグループがいて、さらに経済が発展すると、そのリスクがより大きくなること懸念される問題）という4つの取り組まなければならない課題」とのお話がありました。

オンライン会議の様子

当日は、国際感染症センターを含む6施設から、COVID-19パンデミックの中での活動が紹介されました。本会議には国内35のWCCがオンラインで参加しました。



3月16日、令和3年度 箱根山賞授賞式が行われました

箱根山賞は、NCGMで特に顕著な研究成果を上げた研究者に授与される賞で、箱根山奨励賞は、優れた研究業績が認められた40歳未満の若手研究者に授与される賞で、ともに第14回の歴史があります。第2回となった箱根山特別功労賞も含め、各賞受賞者が発表されました。



箱根山賞設立の経緯を紹介する国土理事長



選考経過を発表する満屋研究所長



箱根山賞を受賞した服部真一朗上級研究員（難治性ウイルス感染症研究部）



学術活動、後進の指導への貢献を称え、箱根山特別功労賞を受賞した伊藤橋司医師（肝胆脾外科：当時）



国土理事長から、トロフィーと目録を受け取る小川竜徳主任臨床工学技士、小室雅人薬剤師、住谷隆輔レジデント（写真左から）
（箱根山奨励賞は、ほかに高松悠樹特任研究員、松下真弥医師が受賞しました）

3月16日、令和3年度 GLOBAL HEALTH AWARD (本賞)、および若手奨励賞の授賞式が行われました

グローバルヘルスへの貢献を顕彰する本賞は、国際医療協力局の井上信明研修課長、狩野繁之熱帯医学・マラリア研究部長、および国際感染症センター（DCC）が受賞しました。また、若手奨励賞（GLOBAL HEALTH YOUNG ENCOURAGEMENT AWARD）は、レーレールイン看護師、松本祥子エイズ治療・研究開発センター（ACC）上級研究員が受賞しました。



選考経過を発表する
池田局長→
←井上課長



✓狩野部長
↓DCCの皆さん



(左から) 池田局長、岡ACC長、レーレールイン看護師、狩野部長、井上課長、DCCの皆さん、国土理事長（松本研究員は欠席のため、岡ACC長が代理出席）

2月28日、JHシンポジウム2021が開催されました

JHシンポジウムは「6NCがSuper Highwayで加速する日本のメディカルサイエンス」をテーマにオンラインで開催されました。

国立高度専門医療研究センター（NC：ナショナルセンター）医療研究連携推進本部（Japan Health Research Promotion Bureau：JH）は、我が国の6つあるNCの資源・情報を集約し、それぞれの専門性を活かしつつ有機的・機能的連携を行うことによって、NCが世界最高水準の研究開発・医療を目指した新たなイノベーションを創出することを目的として、2020年4月に設立された組織です。

冒頭、3 NCの各理事長の開会挨拶に続いて、伊原厚生労働省医政局長の来賓挨拶が高野NC支援室長によって代読されました。JH本部長を務める植木糖尿病研究センター長はJHの設立、活動など概要について紹介しました。



植木浩二郎JH本部長

「Super Highway」は10Gbpsの高速ネットワークで、6NC 8 拠点と国立看護大学校を結びます。美代医療情報基盤センター長は、この高速ネットワークの医学研究への活用、医学教育への活用、診療への活用について説明しました。診療に関しては、次のような例を挙げました。「医師が『次の患者さん、どうぞ』というベトナムにいる患者さんの三次元画像が現れ『調子はどうですか？』と聞くと、検査値が医師の目の前に出てきて、ベトナム語も自動的に翻訳され、意思疎通もできます。『今回も同じく薬を出しますね』と医師からいわれた瞬間スマホに処方が入ってくる。この患者さんは、ロボットを遠隔で操作して手術を受ける予定です。渡航費用がかからず日本の医師の手術が受けられ、医師が『手術は1か月先ですね』

というスマホに予定が入っている。30分後にはドローンが薬を配達してくれる。こういう未来が来るかもしれません。」

JH Super Highway の診療への活用期待

- ・情報ネットワークが、薬師従事者、患者、AIを相互につなぐ
- ・高速回線は、大容量データ転送に加えて、低遅延を実現する
- ・低遅延は、リアルタイムの情報共有や、遠隔ロボット手術などを実現

医師



患者

- ・「調子はどうですか」と聞いたら、患者さんの三次元画像が現れた
- ・「この方は、ベトナムにいますね」と表示された
- ・「調子はどうですか」と聞いたら、検査値が医師の目の前に出てきた
- ・ベトナム語も自動的に翻訳され、意思疎通も可能
- ・1か月の手術は、手術はロボットを日本から遠隔で操作する予定

- ・「今回も同じく薬を出しますね」と医師からいわれた瞬間、スマホに処方が入ってくる。処方内容が医師のスマホに転送されて、チェックしなくてはならない
- ・手術は、1か月後です。と聞いたら、スマホに入力した手術の予定が予定に入っている
- ・30分後には、ドローンが薬を配達してくれる



美代賢吾JHデータ基盤課長



国土典宏理事長

国土NCGM理事長は、閉会挨拶で「JHが設立されてから2年間、このように発展したこと、その成果を報告する、このようなシンポジウムを初めて開催できたことをうれしく思っています。

今回は、高速ネットワークSuper Highwayで6つのナショナルセンターが結ばれたことを記念して開催されました。

JHのミッションを考えたときに、Super Highwayは最も重要なインフラの一つです。本日は、その活用の事例を発表できましたし、JHの今後について力強い応援のメッセージをいただきました。

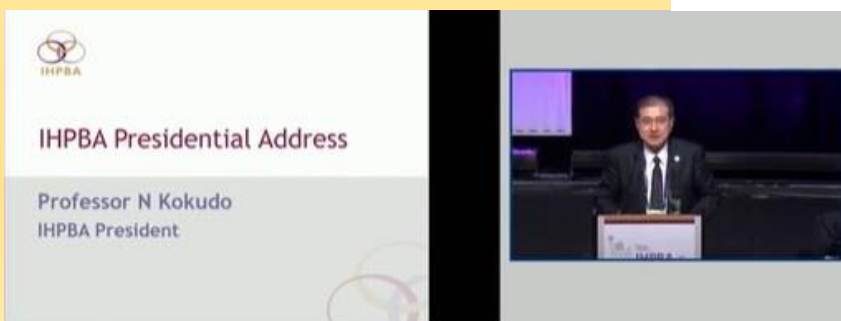
この機会に医療ICT化を推進することによって、医療の研究開発の基盤を提供し、医療医学の発展のために貢献したい、それがNC全体の願いであります」と述べました。

3月31日、NYで開催されたIHPBA世界会議で、国土理事長がIHPBAの理事長として開会挨拶を行いました

IHPBAは、3000名を超える会員を擁する世界最大の肝胆膵外科系国際学会です。このスピーチのなかで国土理事長は、NCGMが長い歴史を持ち、100年以上前に対応したスペインかぜの模様を紹介するとともに、COVID-19については、横浜港のダイヤモンド・プリンセス号におけるNCGMのクラスター対応について述べました。また、このときに米国CDCやNIHのスタッフがダイヤモンド・プリンセス号での治療や臨床治験のために米国から日本を訪れたことや、ECMOでの治療の模様なども紹介しました。

2年に一度開催される、この世界会議には約500人が現地参加し、国土理事長のスピーチは盛大な拍手（standing ovation）を受けました。（IHPBA: International Hepato-Pancreato-Biliary Association）このスピーチは、以下からご視聴いただけます。是非ご覧ください。（英語で行われました。）

<https://www.youtube.com/watch?v=x71gPO8n6S4>



2月16日、2021年度 GHM High Citation Award授与式が行われました

GHM (Global Health & Medicine) は2019年に創刊された、NCGM発行の英文学術誌です。国土典宏理事長は「皆様のご協力のおかげで、GHMは順調に刊行を続けており、高い『インパクトファクター』がつくよう、がんばっています。優れた論文は、より多くの論文に引用 (Citation) され、議論が展開され、それがさらなる科学の発展につながっていきます。『引用が多い』ということは、それだけ医学の発展に貢献しているということです。受賞した皆さんの努力と貢献を称えます」と述べました。最優秀賞を受賞したセンター病院形成外科の山本匠診療科長は「素晴らしい賞をいただき、とてもうれしく思います。GHMに論文を発

表させていただいたあとに、ほかのジャーナルの論文で self citationもしましたが、研究者向けSNSのフォロワーからも多数問い合わせがあり、そういった方々の論文にも引用してもらったおかげだと思えます。引用数の多い論文を発表できたのは、周りの方々の助けで良い臨床研究ができたおかげです。今後もNCGM発のエビデンスを世界に発信しGHMのさらなる発展に寄与できれば、と思っております」と述べました。



(左から) 唐子国際診療部副部長、杉山センター病院長、早川佳代子医長、南本亮吾科長、伊藤橋司医師、山本匠科長、国土理事長、宋GHM室長
※ 坪井基行医師 (国際医療協力局人材開発部研修課) は、海外出張のため当日欠席

国際医療協力局の坪井基行医師が、日本感染症学会の「令和3年度北里柴三郎記念学術奨励賞」を受賞しました

国際医療協力局 運営企画部 保健医療開発課の坪井基行（もとゆき）医師が、日本感染症学会の「令和3年度北里柴三郎記念学術奨励賞」を受賞しました。

本賞は、日本感染症学会とそれに関連する領域において優れた研究を発表した40歳以下の会員から毎年一人選出される賞です。

◆受賞論文

Prevalence of syphilis among men who have sex with men: a global systematic review and meta-analysis from 2000-20



※本論文は、2021年7月『The Lancet Global Health』に公開されています。

[https://www.thelancet.com/journals/langlo/article/PIIS2214-109X\(21\)00221-7/fulltext](https://www.thelancet.com/journals/langlo/article/PIIS2214-109X(21)00221-7/fulltext)



国府台病院の霊安解剖棟が完成しました！

国府台病院の解剖室は老朽化のため、平成29年以降使用できない状態で、霊安室とともに建て替え工事中でしたが、令和4年3月に竣工となり、令和4年度より新たに「霊安解剖棟」として運用が開始されます。

この度、新築となった解剖室は空気感染対策として陰圧式空調システムを採用し、HEPAフィルターを通し室外に排気する独立換気システムで十分な換気回数を維持する設計となっています。

また、解剖台はラミナーフロー式を採用し、これにより天井から床方向への一方向性の気流が保たれます。最新のバ

イオハザード対策用として生まれ変わったこの解剖室は、医療従事者にとってより安心・安全な解剖を提供することが可能で、臨床研修医の教育にも貢献できるものと考えます。



(左から) 中村（前）看護部長、竹内臨床検査技師長、大出臨床検査科診療科長、青柳院長、柳内副院長、早川副院長

国府台病院児童精神科は、「こころの健康づくり対策事業 ひきこもり対策研修」を開催しました

国府台病院 児童精神科診療科長 宇佐美 政英

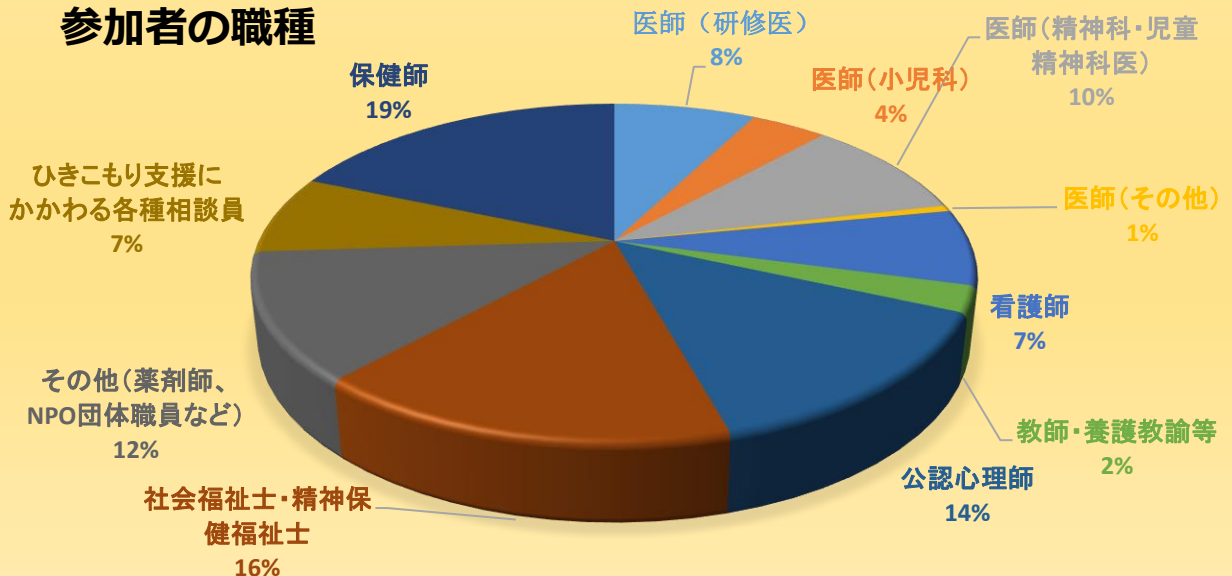
本研修は、令和3年度厚生労働省こころの健康づくり対策事業の一環として、11月と1月にオンライン形式で開催されました。全国各地域で「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」に基づいたひきこもり支援に携わる人材の確保とその育成を目的として実施される研修で、平成22年度から連続してNCGMが選定され、児童精神科が実施しています。今年度は7名の専門家による講義と質疑を各回2日間にわたって行いました。

本研修は、約470名のひきこもり支援者が受講しました。昨年度、社会福祉推進事業「ひきこもりの多様性とその支援手法に関する調査」を児童精神科が実施したことで本研修がより多くの地域や職種の方に認知されたようで、昨年度の倍以上の受講生が参加しました。

コロナ禍におけるひきこもり支援の難しさなど、受講後のアンケートに寄せられた支援者の生の声は事業後に厚生労働省へ報告します。日々奮闘する全国のひきこもり支援者の多くが「本研修の実践的な学びを明日からの支援にすぐ活かしていきたい」と、非常に高い満足度が示されました。

令和3年度、児童精神科は、思春期精神保健対策として、8月と10月に「医療従事者専門研修」を、また2月には「医療従事者専門研修応用コース」をオンラインで開催し、延べ834名が受講しました。これら5回の研修を通じて、子どもの精神科医療に携わる医療関係者や、ひきこもり対策に関わる専門家の増加と質の担保のために、本研修プログラムの果たす役割と意義を大いに示しました。

参加者の職種



3月10日、JICA-DCC意見交換会、DCC大曲センター長講演会をオンラインで開催しました

JICAとの意見交換会では、日本国内の新型コロナウイルス感染症対応の海外への発信のあり方、抗生剤適正使用に対するDCCの国内外での取り組みや海外支援上の課題、WHO GOARN研修修了者のJapanロスターを利用した国内の専門家

への迅速な海外派遣要請情報の共有など多岐にわたりました。

JICAからはDCCに、JICA技術協力に関し、DCCが把握している国際感染症専門家の人材プールの活用など、今後の期待が具体的に寄せられました。



意見交換会の様子（上：DCC、下：JICA）

JICAの多様な事業を活かした両機関の連携のあり方について、今後の関係構築に向けて有意義なキックオフ会となりました。

また大曲センター長は、COVID-19の最新動向、感染症対策における国際連携とDCCの取り組みをテーマに講演しました。

3月24日、WHO GOARN派遣帰国報告会をオンラインで開催しました

2021年12月～2022年3月にパプアニューギニア（PNG）へCOVID-19対応支援で疫学専門家としてGOARN派遣された国際医療協力局の坪根基行医師の帰国報告会を開催しました。

COVID-19パンデミックの中で、派遣前から渡航日延期や派遣活動中の制約などがありました。現地でのサーベイランス実施やサーベイランスシステムの向上に関する業務など、短期間ながら積極的に活動していた様子が共有されました。

聴講者からは「PNGのCOVID-19の状況は、派遣された人しか分からないので、現地の状況の共有は大変貴重でした」などのコメントをいただきました。



聴講者からの質問に答える坪根基行医師



国際医療協力局の宮崎一起看護師にラオス国保健省より功績賞が授与されました

宮崎一起看護師は、JICA持続可能な保健人材開発・質保証制度整備プロジェクトの専門家として、2020年1月から2022年1月までの2年間ラオスに派遣されました。2019年に新設されたラオス看護師助産師国家試験制度の実施を支援し、2021年1月にはラオス初の全国規模での国家試験の実施、その後の結果分析、出題基準および試験問題の修正、問題バンクの作成とデータに基づく試験問題の選出方法の確立等に貢献しました。また、全ての過程を標準化すべく、国家試験実施マニュアルの改定、国家試験問題作成・評価マニュアルの新規作成を支援し、それらは保健省承認の下に全国の関係機関に配布されました。それらの貢献に対して、離任時にラオス保健省より功績賞が贈

られました。

宮崎看護師は「2000年代から準備を重ねてきたラオス初の国家試験実施に関わったことは感慨深い。また、国家試験が成功裏に開催され期待通りの合格者数となるのが分かり、ラオス医療従事者の質向上に貢献する大きな一歩を踏み出したと、保健省の方々と喜びを分かち合った瞬間は印象深く残っています」と語り、受賞を大変喜んでいました。



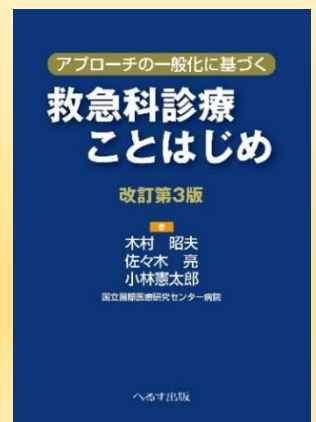
賞状を持つ宮崎看護師と日本およびラオスのプロジェクトメンバー

NCGM職員の著書紹介

改訂第3版 アプローチの一般化に基づく 救急科診療ことはじめ
木村 昭夫、佐々木亮、小林憲太郎（救命救急センター）◆著

これさえ押さえていけば、いかなる救急患者に対しても、世界標準の診療レベルを提供可能。初版、前版において強調したこのメッセージを今回の改訂でも継承しつつ、詳細な内容については最新の救急医療・救急医学に即してアップデートしました。point-of-careについては「診療の進め方」の項で新たに取り上げました。初期研修医、救急科専攻医の方はもちろ

ん、救急医療を再学習したい方にも、ぜひポケットに入れてご活用いただきたい一冊。



へるす出版
2022年4月

センター病院大腸肛門外科 合田良政医師が、四国中央市広報誌の取材を受け、記事が3月号に掲載されました

愛媛県四国中央市出身の合田医師は、「腹膜疑粘液腫」という発生頻度が100万人に1人ともいわれる稀な病気の治療法を恩師である矢野秀朗先生から教えを受けました。「完全減量手術と術中腹腔内温熱化学療法（HIPEC）」です。これは腹膜疑粘液腫や大腸がん腹膜播種の根治につながる画期的な治療法です。

この治療法では、開腹して、目視できる粘液が広がっている腹膜と臓器を全て切除します（完全減量手術）。目に見えない小さな腫瘍細胞を死滅させるために、抗がん剤を溶かした生理食塩水を42度程度に温め、腹腔内に注入し循環させます。これがHIPECです。温熱

化学療法では2.5ミリ以下の腫瘍しか殺せないため、手術でしっかり腫瘍を取りきらないと意味がありません。技術的に難しい手術で、日本で数人しかできないといえます。合田医師は、腹膜悪性中皮腫の少女を治療しました。合計5回の手術を経て、いま彼女は元気なっています。「これからも根治まで見守るつもりです」と合田医師は語りました。



合田医師

森岡慎一郎医長が、日本医師会公式YouTubeチャンネルの動画で新型コロナの後遺症について解説しています

新型コロナウイルス感染症にかかった後の罹患後症状、一般的に後遺症と呼ばれる症状について、

分かりやすく解説するとともに、積極的なワクチン接種の検討を呼び掛けています。



- ✓ 新型コロナウイルス感染症の後遺症の症状について
- ✓ 後遺症が現れる時期について
- ✓ 変異株と従来株で後遺症の症状に違いはあるか
- ✓ 後遺症の原因・治療法
- ✓ 対策について
- ✓ 今後の課題



動画は、以下からご覧ください。

<https://youtu.be/xA0QdCueA6E>

春山怜医師がWHO西太平洋地域事務局 子宮頸がん排除地域行動計画に関する諮問委員に任命されました

子宮頸がんは罹患を予防できる数少ないがんの一つであり、2020年5月、WHOは子宮頸がん排除を加速するための世界戦略を発行し、各国にHPVワクチン、検診、治療への公平なアクセスを推し進めています。

世界の子宮頸がん症例の4分の1が、日本を含むWHO西太平洋地域で発生しており、地域全体としての行動計画が策定されることになりました。

国際医療協力局の春山医師は、その策定にあたり、諮問委員の一人として大きな役割を期待されてい

ます。任期は2022年5月から10月末の予定です。

春山医師は、WHO本部非感染性疾患（NCD）管理部門コンサルタントとして、子宮頸がん排除に向けた世界戦略や関連文書の策定にも貢献しています。



研修医の窓

2022年度 研修医勉強会を開催しています

研修医2年目・春日憲太郎

COVID-19の収束が見えないまま始まった2022年度の研修ですが、今年も研修医勉強会を積極的に開催していきたいと考えております。昨年同様、各科の先生方やコメディカルの方々のご協力のもとでのレクチャーを中心に進めていきながら、昨年より始まったCase Reportを参考にした勉強会も継続しています。それとともに、今年度は研修医間での内科当直の振り返りや心電図・胸部レントゲン読影等のブラッシュアップなどの新しい形の勉強会を始めていきます。現在のような制約が少なくない環

境下でも、研修が終わった際に、僅かでも成長できていればと思っております。



2022年4月に、研修医2年中村が中心となって行った「必要時指示」に関する勉強会の様子

NCGM職員の著書紹介

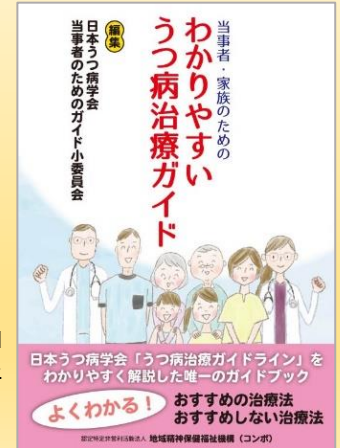
当事者・家族のための わかりやすいうつ病治療ガイド

日本うつ病学会 当事者のためのガイド小委員会◆編集
宇佐美 政英（国府台病院児童精神科診療科長）◆分担執筆

日本うつ病学会が公開している「うつ病治療ガイドライン」は、最新の研究が豊富に載せられており、専門知識のない人が読みこなすのに難しいことがあります。このガイドでは、日本で初めて当事者・家族向けに分かりやすく解説し、児童思春期のうつ病にも触れられています。

うつ病治療を受けている人、関係者の皆様にお勧めです。

COMHBO地域精神
保健福祉機構：発行
2022年4月



研修医の窓

“デジタル世界でオンライン”追いコン”を開催 研修医2年目・大木将平

毎年行われる研修医送別会こと「追いコン」。例年であれば出物や会場に趣向を凝らしたところですが、感染対策を徹底する必要性から今年は最新のオンラインサービスを使って全く新しい形の追いコンを企画しました。

Gather（ギャザー）はゲームのようなデジタル世界の中で自由にアバターを操作しながらビデオ通話やチャットで通信できる最新サービスです。実際に使ってみると、デジタル世界でビデオ通話を組み合わせることでまるで本当のパーティをしているかのように、60人の研修医が

デジタルの会場内で思い出話をすることができました。また、多くの職員に出演いただいて作成した記念動画もGatherの世界の中で上映でき、好評でした。

世界の医療をリードするNCGMの研修医ならではの先進的な視点で感染対策を徹底した追いコンを企画できたことを大変うれしく思います。



（写真：記念動画に出演した皆さん）

国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！ モンゴル国 Vol. 9

国際協力機構（JICA）モンゴルにおける医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト
長期派遣専門家 池本めぐみ（助産師）



私は、2021年4月にモンゴルに赴任し、まもなく一年になります。当初の目的、医師および看護師の卒後研修の強化に加え、2021年6月にモンゴル政府から助産師の卒後研修の強化への支援要請を受け、助産師に関する調査や聞き取りを行いました。ウランバートル市内と地方での助産師の職務の相違、

卒後研修の体制の未整備等の課題が明らかになりました。これらの結果から助産師の指導者の養成、新人助産師の研修プログラム、専門研修の開発等の活動が決定されました。

2021年12月、助産師の指導者養成研修の開発に向け、3名の助産師が看護師初のファシリテーター養成研修に参加し、国レベルのファシリテーターとなりました。彼女らの笑顔は、助産師の卒後研修の強化が実現し、臨床で生き生きと働く助産師への光を見ているようでした。

写真：研修に参加した助産師と
（池本助産師/右から二人目）

1月31日、朝日新聞のSDGs特集で国際医療協力局の 岩本あづさ医師と神田未和助産師が紹介されました

国際医療協力局が事務局を務める学会、NGO、公的機関などによるネットワーク「みんなのSDGs」が、1月末に「取り残されやすい人々への新型コロナウイルス感染症影響各種実地調査から見える実態」をテーマに開催したオンライン報告会が、特集で取り上げられました。報告会では、国際医療協力局人材開発部長村上仁医師がリーダーを務める研究班の調査結果を神田助産師が発表。神田助産師は、手取り収入が122万円未満で相対的に貧困のある人1,000人のうち179名が重度の精神的苦痛を抱えていた

とし「食糧支援や公共料金の支払期限延長、20～30代へのメンタル支援の有効性」を提案しました。また、岩本医師（連携推進課）は、みんなの外国人ネットワーク（MINNA）がNPO法人国際活動市民中心と共に行なってきた活動の知見をもとに、言葉の壁などに阻まれてワクチン接種から取り残されている外国人の問題を指摘しました。

岩本医師（左）
と神田助産師



国際医療協力局は、東京都新型コロナウイルス感染症医療機能強化型施設と高齢者医療支援型施設を支援しました

2月上旬、東京都からオミクロン株の特性に対応した臨時の医療施設の立ち上げに当たり、医師派遣の依頼がNCGMにあり、国際医療協力局は2月21日より、医師を派遣しました。

当初の派遣施設は、宿泊療養施設に医療機能を付加した、ファーストビレッジホテル東京有明（2月21～28日）。全体で200室ほどあり、基本的には65歳以下の軽症のコロナ陽性者を受け入れる施設です。医師2名（うち1名は1週間交代）、看護師6名が配置されました。3月に入って派遣先が、

高齢者医療支援型施設である、旧東京女子医大東医療センターに変更になりました。全150床を有し、基本的には、要介護で高齢者施設に入所していた陽性者を受け入れる施設です。医師2名、看護日勤8～10名、夜勤5～6名が配置されています。（3月1日時点での入所者は41名）



旧東京女子医大東医療センターの受付エリア（初回入館時に抗原検査実施）

国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！ コンゴ民主共和国 Vol.10

国際協力機構（JICA）保健人材開発支援プロジェクトフェーズ3
長期派遣専門家（基礎・継続教育） 皆河 由衣（看護師）

コンゴ民主共和国保健省は保健人材の偏在と質の改善を目標としており、私たちはプロジェクトを通じて看護師及び助産師の養成と適正配置の促進を支援しています。その中で、私は2021年5月より看護基礎・継続教育専門家として中級保健人材養成校の看護・助産学科における新教育カリキュラム(コンピテンシー・アプローチ)の導入と普及に携わっています。新教育カリキュラムは、授業・

演習・実習からのコンピテンシー習得を目的としています。それらを円滑に進めるには学校と実習機関の連携が重要であり、現在は実習指導体制の構築に向けて取り組んでいます。これからも現地の方々と協力し、コンゴ民における看護・助産の基礎教育の質の向上に尽力します。



（新教育プログラムについて、介入校教員らと進捗確認を行う会議にて）

3月11日、小児科病棟では、元ラグビー選手と一緒に体を動かす、楽しいオンラインイベントを開催しました

センター病院 子どもの療養環境に関するWG一同

このイベントは、昨年に引き続き、NPO法人Being ALIVE Japanの協力でオンライン開催されました。プレイルームにお子さん、お母さん、スタッフが集まりました。

ラグビーの動きを取り入れた「ラグッパ体操」は、立っても座っても行えます。はじめはみんな少し恥ずかしそうに小さな動きでしたが、体を動かしているうちに楽しくなり、最後には全員で元選手のみなさんと一緒にこれでもかと体を大きく動かして、大笑いして体操していました。

それぞれの目標「トライ」を共有する場面では、早起きや運動習慣の見直し、「ひみつ!」と大きな文字で書かれたものまで、思い思いの目標をみんなで発表し合いました。司会進行をしてくださった

NPO法人の北野さんも元選手のみなさんも、みんなの目標を応援してくださいました。

子どもたちは入院中、時には孤独を感じてしまうこともあるかもしれませんが、それでもこのイベントを通して、同じ病棟にはこんな子どもも入院していたんだ、大人の人たちもこんなに応援してくれるんだ、ひとりで頑張っているんじゃないかと、みんなチームなんだ、と感じてもらえるような交流の時間になったと思います。イベントから病室に戻った子どもたちは、とても明るく、すっきりした表情をしていました。

楽しく体を動かし、たくさんのエールをもらえた、幸せな時間をありがとうございました!



「TRY MATES」のポスター (左)
会場となったプレイルーム (上)
参加者にプレゼントされたラグビーボール型クッション (右)



企画・発行：
NCGM 広報企画室



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。